

論文

ソーシャルワーク・プロセスの局面についての考察

A Study on Phases of Social Work Process

岩間 文雄*¹

要約：ソーシャルワークの展開過程は、一般的に複数の局面から構成されているとされる。この局面の区切り方や数は、文献ごとに違いが見られる。ソーシャルワークに関する文献を概観して整理すると、アセスメント、プランニング、援助活動、終結といったよく知られる呼称の局面を用いたジェネラリスト・ソーシャルワークの類型がある。日本における社会福祉士・精神保健福祉士の養成課程で用いられるテキストも含め、この類型に属する枠組みを用いて展開過程を説明する書籍は多数存在する。一方で、援助展開を時間的経過に沿って区切るライフモデルで用いられる局面の類型がある。

ジェネラリスト・ソーシャルワーク類型とライフモデル類型を比較すると、局面の数は前者が多く後者が少ない。また、局面を区切る基本的な考え方も、前者はソーシャルワーカーとクライアントとの共同作業に着目しているのに対して、後者は援助展開の時間的経過に着目しているなどといった違いがある。ソーシャルワークの展開過程において一般的にいわれる、「局面から局面への推移は円環的（または螺旋状）である。」という特徴は、比較的多くの局面から構成されるジェネラリスト・ソーシャルワーク類型に色濃く反映されており、局面と局面の関係性を視覚的にとらえることを可能とするいくつもの説明図が発表されている。それに対し、ライフモデル類型では、時間の経過に沿って区切った少数の局面からプロセスが構成されることから、円環的（螺旋的）に推移するという説明とは合致しにくい、といった違いがある。日本の書籍ではあまり紹介されることのないライフモデル類型の枠組みは、シンプルな構造をしており、地域や国の実践に応じたソーシャルワーク展開過程の再検討を行なおうとするとき土台となる可能性があると考えられる。

Key Words：ソーシャルワークの展開過程、局面、ジェネラリスト・ソーシャルワーク、ライフモデル

I. はじめに

ソーシャルワーク実践において、「展開過程」は援助活動をどのような手順で実行するのかということそのものであり、大変重要な実践の土台である。展開過程は、一般的には援助の進行に沿っていくつかの区切られた局面¹⁾を構成要素として成り立つものと説明される。日本の社会福祉士養成課程のテキストとして用いられる書籍では、これまでソーシャルワークの展開過程については、ケースの発見、インテーク、アセスメント、プランニング、支援の実施、モニタリング、支援の終結と事後評価、アフターケアといった区切り方が典型例として採用されてきた。しかし、海外のソーシャルワークに関する文献も含めてレビューすれば、日本においてなじみの深いこうした区切り方と同じ説明がされているものばかりではない。どのように区切るかという視点の違いや各

局面の呼称の違いに着目すると、むしろ文献ごとにかかるバリエーションがある。本研究の目的は、ソーシャルワーク実践の展開過程の局面に着目し、文献研究を通じてそれらを整理することである。また、こうした展開過程の区切り方には、大きく二つの類型があることを説明しながら、日本の書籍では採用されることが比較的少ない、援助の進行を時間軸に沿ってとらえたライフモデルの局面の特徴、およびその意義について述べる。

II. 日本の文献におけるソーシャルワークの展開過程

日本におけるソーシャルワーカーの国家資格である社会福祉士・精神保健福祉士の養成教育において、ソーシャルワークの展開過程がどのように教えられているのかまず確認しておきたい。社会福祉士養成課程の科目「ソーシャルワーク演習」における「教育に含むべき事項」では、ソーシャルワークの展開過程をケースの発見、インテーク、アセスメント、プランニング、支援の実施、モニタリング、支援の終結と事後評価、アフターケアと

2021年12月7日受付／2022年1月19日受理

*¹ IWAMA Fumio

関西福祉大学 社会福祉学部

し、それぞれに応じた場面と過程を想定した実技指導を行うことと明記されている²⁾。社会福祉士のテキストとして用いられる書籍においても、この枠組みにほぼ沿った説明が展開される。一般社団法人日本ソーシャルワーク教育学校連盟が編集した「ソーシャルワークの理論と方法[共通科目]」というテキスト(一般社団法人日本ソーシャルワーク教育学校連盟 2021b:38-40)では、ケースの発見とエンゲージメント(インテーク)、アセスメント、プランニング、計画の実施とモニタリング、支援の終結と結果評価、アフターケアとされている。同じく精神保健福祉士の科目「ソーシャルワークの理論と方法(専門)」のテキスト(一般社団法人日本ソーシャルワーク教育学校連盟 2021a:12-3)では、ケース発見、エンゲージメント(インテーク)、アセスメント、プランニング、支援の実施、モニタリング、事後評価(エバリュエーション)、支援の終結、アフターケアとされている。援助の実行段階を計画の実施とするのか支援の実施とするのか、モニタリングを一つの局面として独立させているかどうか、事後評価を終結の前とするのか終結と併記するのといった微妙な違いはあるものの、ケース発見からアフターケアまでの局面を含んで展開されるとする説明を採用していることは共通している。

上記のような枠組みは、社会福祉士制度のなかですでに形成・確立されている。2001年に出版された『新版社会福祉士養成講座8 社会福祉援助技術論I』(福祉士養成講座編集委員会 2001:230-5)では、インテーク(受理面接)、アセスメント(事前評価)、目標設定、援助計画、援助活動(介入)、事後評価、終結、追跡調査という説明がされている。2002年に出版された『社会福祉士・介護福祉士養成講座 社会福祉援助技術論』(久保ら 2002:84)ではインテーク、アセスメント 情報収集、プランニング 契約、介入(インターベション)、評価(エバリュエーション)、終結と説明されている。このように、ソーシャルワークの展開過程を構成する局面に目を向けて20年ほど遡ってみても、今日の書籍で採用されている局面の区切り方と比べて、「非常に大きな変化」とまでいえる違いは見られない。社会福祉士や精神保健福祉士の標準化された教育内容として示された展開過程のモデルは、有識者による幾度もの検討を経て確立され、教育を通じて広く浸透しているといえるだろう。

III. 展開過程の区切り方における二つの類型

日本のソーシャルワーカーの国家資格である社会福祉

士、精神保健福祉士の教育内容としてすでに確立された感のある標準的な展開過程の説明には、理論的な背景がある。『ソーシャルワーク基本用語辞典』の「ソーシャルワーク・プロセス(social work process)」の項目では、「ソーシャルワーク統合化以降、ソーシャルワーク・プロセスは一般的に8つの局面から成る」とされている(日本ソーシャルワーク学会 2013:144)。その局面としてインテーク、アセスメント、プランニング、インターベション、モニタリング、エバリュエーション、終結、フォローアップ³⁾をあげている(日本ソーシャルワーク学会 2013:144)。この記述にあるように、日本において一般に知られているソーシャルワークの展開過程は、明確に「ソーシャルワーク統合化以降」に確立されたものである。それはつまり、ジェネラリスト・ソーシャルワークの展開過程に基づく説明を採用しているということである。

『ソーシャルワーク研究』誌上での岩間の解説によれば、ケースワーク、グループワーク、コミュニティオーガニゼーション(コミュニティワーク)という三つの援助方法の統合化は、それらを単純に合体させた段階、それぞれの方法論に共通する原理や技術の抽出を図ろうとした段階、共通基盤の上に三つの援助方法を位置づけようとするジェネラリスト・アプローチが形成された段階を経て、さらに体系化が進展してジェネラリスト・ソーシャルワークが形成されるにいったとされる(岩間 2005:54-7)。また、ジェネラリスト・ソーシャルワークは「概ね1990年代以降に確立した現代ソーシャルワーク理論の構造と機能の体系である」(岩間 2005:53)と評している。日本においても、多くのソーシャルワークのテキストにおいて、ジェネラリスト・ソーシャルワークの理論的枠組みを土台として書かれていることが多い。

ソーシャルワークの展開過程の局面にのみ着目しているなら、ジェネラリスト・アプローチからジェネラリスト・ソーシャルワークへの統合化の進展は、大きな変更は見られなかったといえる。副田によれば、ジェネラリスト・アプローチの援助過程は、「①情報収集とアセスメント、②目標の計画作成、③計画の実施、④評価、⑤終結」であるとされる(副田 2005:147)。一方で、社会福祉士養成課程のテキストで頻りに引用され参考文献としてあげられるJohnson & Yancaの著書『ジェネラリスト・ソーシャルワーク』においては、ソーシャルワークのプロセスは、アセスメント、プランニング、援助活動、

終結という4つの主要な構成要素⁴⁾からなるとされており (Johnson & Yanca = 2004 : 349), 副田の著作の説明と比べてみると, 「評価」を除けば局面の区切り方はほぼ重なる。ジェネラリスト・アプローチからジェネラリスト・ソーシャルワークへの統合化の進展において, 展開過程の枠組みは概ね踏襲されていることがわかる。

Johnson & Yancaの著作に代表されるジェネラリスト・ソーシャルワークの展開過程 (アセスメント, プランニング, 援助活動, 終結を主要な局面とする) は, 細部の違いにとらわれないなら, 今日多くの文献で採用されているソーシャルワーク展開過程の局面の区切り方として一つの類型をなしているといえよう。この類型に属する例として, Timberlakeらの著作 (Timberlake et al. 2008) では, エンゲージメント, 情報収集, アセスメントと援助計画の契約, インターベンション⁵⁾, エバリュエーション, 終結⁶⁾という局面の分け方を用いて説明されている。また, Sheafor & Horejsiの著作では, インテークとエンゲージメント, 情報収集とアセスメント, プランニングと援助契約, インターベンションとモニタリング, 最終評価と終結⁷⁾という局面の区切り方を用いた説明がされている (Sheafor & Horejsi 2015 : 108)。日本の文献では, 「ジェネラリスト・ソーシャルワークの枠組みに準じている」と明示されていなくても, この類型に属するものと位置づけることができる局面の区切り方を用いた説明をすることが非常に多い。

しかし, そうしたジェネラリスト・ソーシャルワークの類型とは明らかに異なる視点の展開過程の局面を採用したものが, 「ライフモデル」である。Gitterman et al. (2021 : 173) は, ライフモデルの実践は段階的なものであるとしたうえで, 4つの局面 (phases), つまり準備期 (preparatory), 初期 (initial), 進行期 (ongoing), 終結期 (ending)⁸⁾から構成されるとする。ただし, 目次によれば, 内容の詳細な説明にあたっては, initial phase, ongoing phase, ending phaseの三つの局面に沿った章の編成がされている。そのため, Gitterman et al. (2021)の局面の分け方は preparatory, initial, ongoing, endingの4つ (本文P173の記述による), あるいは initial, ongoing, endingの3つ (目次の分け方による) という二通りのとらえ方が可能であるが, 本論では後者のとらえ方に基づいて考察をすすめる。この枠組みは, ソーシャルワークの援助展開の進行, 時間的経過に沿った局面の移り変わりに焦点化して区切ったものであり, アセスメント, プランニングといったクライエ

ントとワーカーとの協働作業に焦点をあてて局面を区切るジェネラリスト・ソーシャルワークの説明と明確に異なる考え方に基づいている。

IV. ライフモデルにおける展開過程

広く知られているように, ライフモデルでは人と環境の相互作用において生じる不均衡状態, 不適応状態から生じる生活ストレスに着目し, 人と環境の接触面に介入し, 関係性の改善を図ることで人と環境の相互作用の質を高めようという考え方を基本とする。ジェネラリスト・ソーシャルワークは, ライフモデルを中核においていると表現されることもあるように, ライフモデルとジェネラリスト・ソーシャルワークは密接に関係する概念である。

ここで議論の前提として, 「モデル」と「アプローチ」の性質の違いについては整理しておく必要があるだろう。ソーシャルワークの「モデル」や「アプローチ」という用語の用いられ方については, 一般的に「厳密な定義はされていない」といわれるが, モデルに対してアプローチは「理解が全体的, 具体的, 実践的になっていく」 (一般社団法人日本ソーシャルワーク教育学校連盟 2021b : 120-1) と説明される。言葉の意味から考えて, モデルはとらえようとする対象を概念的・抽象的にとらえようとするレベルのもので, アプローチはより具体的な対象への接近方法のレベルのもので, と考えることが自然である。そうした前提に立つならば, 先に述べたように, ジェネラリスト・アプローチから統合化がさらに進展して確立されたのがジェネラリスト・ソーシャルワークであるという経緯を考えれば, ジェネラリスト・ソーシャルワークはモデルよりもアプローチに近い性質を持つと位置づけることができる。それに対し, ライフモデルの方が抽象的で実践と距離のある理論であるから, Ⅲ. で整理したような二つの類型が生じてくるのは, アプローチ (援助実践を想定したより具体的な枠組み) とモデル (考え方や分析の方法を示す理論的な枠組み) の性質の違いのためと解釈することもできる⁹⁾。

また, 「援助の進行を時間軸に沿ってとらえた枠組み」は, Gitterman et al. (2021)のライフモデルに限定されたものではないのかという疑問が生じるが, そうとはいきれない。ライフモデルの局面に非常によく似た例として, Bogoの著作がある。Bogoは, ソーシャルワーク実践の展開過程について「援助の過程は, 段階 (stages, または phasesとも呼ばれる) を経て進行する体系的なものと考えられている」 (Bogo 2018 : 191)¹⁰⁾としたう

えで、それぞれの段階は特定のモデルに応じて定義の仕方や課題が異なるものの、ソーシャルワークのテキストにおいては、一般的に preparatory, initial, middle, end にグループ化して集約できるとしている (Bogo 2018: 191)。そのうえで Bogo は、beginning stage, middle stage, endings からなる局面の区切り方を提示している (Bogo 2018: 192)¹¹⁾。Bogo による局面と、Gitterman et al. (2021) によるライフモデルの実践の展開過程における局面を抜き出して比較したものが表1である。構成要素を「phase」と呼ぶのか「stage」と呼ぶのか、初期段階を「initial」とするか「beginning」とするか、中間を「ongoing」とするか「middle」とするかなどの違いがあり、完全に一致するわけではない。しかし、先に説明したジェネラリスト・ソーシャルワークの展開過程の類型を比較対象とすれば、Gitterman et al. (2021) も Bogo (2018) も、どちらも「時間の経過に着目して援助展開を大きく3つに区切っている」という特徴が共通している。そうした点から、この枠組みはライフモデルに限定されるものではなく、一つの類型をなすものと考えられる。

表1 Gitterman et al. (2021) と Bogo (2018) の局面の区切り方の比較

Gitterman et al. によるライフモデルの展開過程における局面	Bogo による援助過程の局面
initial phase ongoing phase ending phase	beginning stage middle stage endings

*それぞれの著作から、局面の区切り方のみ抜粋して筆者が作成した¹²⁾。

V. 考察

1. ソーシャルワーク実践の展開過程の特徴

局面の区切り方に着目した二つの類型について比較検討するにあたって、共通認識となっているソーシャルワークの展開過程の特徴について確認しておきたい。

1) 局面に分けることはプロセスを説明するための手段である。

ソーシャルワーカーがクライアントと関わり、信頼関係を発展させ、問題解決の支援を展開するプロセスは、人と環境の交互作用に着目するという特徴もあり、非常に多くの構成要素が影響を及ぼしあって織りなされていく複雑な営みである。刻々と変化するクライアントとクライアントをとりまく状況に応じて、多様で柔軟な対応が求められる援助実践において、援助展開の局面の移り

変わりの節目が明確にわかるケースばかりではないし、理論に沿った展開ができない場合も想定される。では、ソーシャルワーク展開過程の理論的枠組みを確立しようとする努力は無駄かといえ、決してそのようなことはない。展開過程は、非常に複雑だとはいうものの、「成り行き任せ (random) でも無秩序 (chaotic) でもない」(Mattaini & Lowery 2007: 23)¹³⁾ という指摘の通り、専門職による援助実践として目指すべき方向に沿った秩序を保った取り組みでなければならない。

ただ局面に関して、実践において明確に区別することは難しい (Gitterman et al. 2021: 173) と指摘されることも事実であり、実際の援助を説明するために有用な枠組みを構築することは容易ではない。それでも、ソーシャルワーク実践の重層的な活動の全体像をわかりやすく説明するために、また専門職の養成においてはソーシャルワーカーを目指す学生に実践の展開過程をわかりやすく解説するために、ソーシャルワークのテキストでは、そのプロセスを「いくつかの局面に分けて描写する」ことが必要とされる。同じジェネラリスト・ソーシャルワークの類型に属する局面の区切り方を採用していても、文献ごとに細部が異なるバリエーションが存在するのは、現実の実践により適合する表現や説明を追求した著者による試行錯誤の結果である。ソーシャルワークの展開過程を局面に区切って説明することは容易なことではなく、決して完成された、唯一の正解に到達すべきものという性質のものではない。しかし、ソーシャルワークの説明や教育のためには、有効な手段である。Compton et al. (2005: 4) の「過程を構成要素に分割することは人為的ではあるが、従属するプロセスを明らかにすることは理解を促進する。」¹⁴⁾ という記述の通りであると考えられる。

2) 局面に含まれる構成要素は重複する場合がある。

局面に含まれる構成要素は、複数の局面の間で重複することがある。情報収集が、一つの局面に限定的に属する要素ではないということが典型的な例である。先に触れたように、Johnson & Yanca は、ジェネラリスト・ソーシャルワークの展開過程をアセスメント、プランニング、援助活動、終結から構成されるとしたが、例えば、プランニングによってアセスメントが必要になることもあるし、援助活動が新しい情報をもたらすこともあると指摘している (= 2004: 349)。そして、「4つの段階のすべてが常に呈示されるが、取り組みにおけるさまざまな点

でひとつ以上の段階に焦点があてられ、最も関心が向けられる」(= 2004 : 349) と説明している。つまり、どの局面にもその他の局面の要素が含まれていると考えられる。

また、社会福祉士養成講座編集委員会編集のテキストでは、ケース発見、受理面接(インテーク)、問題把握、ニーズ確定、事前評価(アセスメント)、支援標的・目標設定、支援の計画(プランニング)、支援の実施、モニタリング、終結という、ジェネラリスト・ソーシャルワークの類型に属する局面の区切り方を採用している。そして、例えば「情報収集」は、ケース発見から支援の実施までの各局面にまたがって取り組まれるという概念を図で説明している(社会福祉士養成講座編集委員会 2015 : 98-9)。この記述なども、一つの局面に分類しきれない要素があることを反映しているものといえる。

(1) にもつながるが、もともと切り分けることが難しいソーシャルワーク実践の展開過程という複雑な対象を、便宜的にいくつかの局面に分けて説明しようという試みにおいて、援助実践における基本的な要素が、複数の局面にわたって含まれるということはおく自然なことである。

3) 局面から局面への推移は直線的ではない。

ソーシャルワークの展開過程では、A局面からB局面へ、さらにC局面へと援助が進展したが、状況に応じてC局面からA局面に戻った、ということが起こりうる。ソーシャルワークの展開過程は「非線形」(Mattaini and Lowery 2007 : 23) であるという。Johnson & Yanca (= 2004:349) は、「円環的」としてしている。Compton et al. (2005 : 4) は螺旋状(spiral-like)であるとしている。『ソーシャルワーク基本用語辞典』でも、同じく「行きつ戻りつしながら螺旋状に進展する」としている(日本ソーシャルワーク学会 2013 : 144-5)。

ソーシャルワークの展開過程が「円環的」または「螺旋状」に進行するものであるという特徴は、日本のテキストでは、「援助を実施し、モニタリングをする中で新たな問題が生じるなどの状況があれば、再アセスメントに移行する」という説明に反映されている。エバリュエーション、終結へと向かうまで、必要があれば何度でも援助の実施、モニタリングから再アセスメントに戻りうるという展開を想定するなら、確かにその軌跡は円環的、または螺旋状といえる。

もっと複雑な局面間の移動を想定して、ソーシャル

ワークの展開過程のこの直線的でないという性質を説明しようと試みる文献もある。例えば Sheafor & Horejsi は、このプロセスを、折り返し積み重なりながら行きつ戻りつして、インテークとエンゲージメントから最終評価と終結まで到達する矢印で表現した (Sheafor & Horejsi 2015 : 108)。また、Johnson & Yanca (= 2004:350) における展開過程の主要な構成要素は「4つ」とされていると既にふれたが、本文には図(図1)がつけられている。

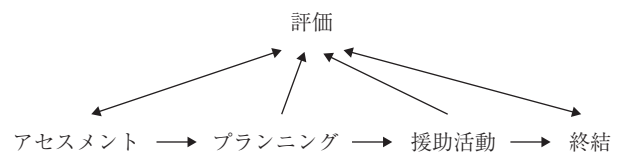


図1 ソーシャルワーク過程
出所：Johnson & Yanca (=2004 : 350)

本文では四つとされた構成要素は、図では「評価」を加えて、円環的に循環することができる構造として説明されている¹⁵⁾。現実のソーシャルワークの展開過程の流れに説明を近づけようとする努力と工夫が、こうした創造力に富んだ解説図を生み出したといえるだろう。

2. 二類型の比較

上記のような一般的に言われるソーシャルワーク展開過程の特徴を踏まえたうえで、Johnson & Yanca に代表されるジェネラリスト・ソーシャルワークの局面の分け方に関する類型(以下「GSW 類型」とする)と、ライフモデルに代表される時間軸に沿った局面の分け方に関する類型(以下「ライフモデル類型」とする)の両者を比較して、その特徴について検討してみたい。

1. の1)に関連して、GSW 類型もライフモデル類型も、プロセスを説明するための手段として便宜的に局面に区切っているという点では違いはない。ただし、どのような要素に着目して局面を区切るかという着眼点には、大きな違いがある。GSW 類型は、「アセスメント」や「プランニング」など、「どんな作業内容を展開するのか」に着目して局面を区切っているといえるだろう。それに対し、ライフモデル類型は、展開過程の時間的経過に焦点化している。「初期」「展開期」といった「援助の進展状況」、あるいは展開過程の「時間の経過」に着目して局面を区切っているといえるだろう。

局面の数からいえば、明らかに GSW 類型の方が多。

GSW 類型では、Johnson & Yanca のものは比較的少ない(本文では4つ、図に示された「評価」も入れれば5つ)が、社会福祉士の科目「ソーシャルワークの理論と方法」のテキスト(一般社団法人日本ソーシャルワーク教育学校連盟 2021b:38-9)では5つ、精神保健福祉士の科目「ソーシャルワークの理論と方法(専門)」のテキスト(一般社団法人日本ソーシャルワーク教育学校連盟 2021a:12-3)では9つ、『ソーシャルワーク基本用語辞典』(日本ソーシャルワーク学会編 2013:144)では8つとされ、4つから9つ程度の局面に分けた説明が用いられる。一方で、ライフモデルタイプの局面の区切り方は3つ(あるいは4つ)である。

1. の2)に関連して、局面に含まれる構成要素は、複数の局面の間で重複することがあるという特徴については、GSW 類型とライフモデルタイプで違いはないと考えられる。「情報収集」や「信頼関係の形成と維持」といった要素は、どちらの類型でも、複数の局面に含まれるといえるからである。

1. の3)に関連して、局面から局面への推移は直線的ではないという性質は、GSW 類型とライフモデルタイプそれぞれへの影響の程度が大きく異なる。この性質は、GSW 類型の枠組みに対してはより大きな影響を及ぼしているようである。ソーシャルワーカーとクライアントの協働作業に焦点化して、4つ~9つという比較的多い局面を用いるGSW 類型では、局面と局面がどうつながっているのか、局面から局面の移行がどのように進行するのかを展開過程を説明するうえで重要である。Sheafor & Horejsi (2015:108) や Johnson & Yanca (= 2004:350) が、局面から局面への直線的でない進行を説明しようと工夫を凝らした作図を試みていることについては既に触れたが、これはソーシャルワーク展開過程の円環的(または螺旋状)に進行するという性質を実践に即して視覚的に表そうとする試みの一環であるといえる。それに対し、ライフモデルタイプにおいてはこの性質はさほど影響を与えていない。時間的経過に沿って援助の進行状況に着目して、3つ(あるいは4つ)という比較的小さい局面に区切るライフモデルタイプでは、局面から局面への推移が円環的(または螺旋状)に進行するという説明が合致しにくい。展開期に入った援助過程が、初期段階に戻るといえることは、通常の援助展開を想定するならば考えにくいからである。

VI. おわりに

ソーシャルワークの概念は、社会福祉士・精神保健福祉士という国家資格の制度化によって、養成課程における教育を通じて広まった。ソーシャルワーク概念の社会への浸透は、ソーシャルワークの社会的位置づけを確かなものとし、実践の意義に対する社会の理解を促進し、ソーシャルワーカーに対する社会的要請を高め、活躍が期待される領域を広げてきた。

そして、2014年 IFSW および IASSW において採択された「ソーシャルワーク専門職のグローバル定義」では、各地域・国の文化や社会状況に沿った定義の「展開」が認められている(社会福祉専門職団体協議会国際委員会 2016:7)。ソーシャルワークの原理・原則に沿う限り各地域・国の社会的・政治的・文化的背景に応じてソーシャルワークの定義を展開することが許容される時代でもある。地域の状況に合わせて定義でさえ独自の展開が可能であるから、ソーシャルワーク実践の展開過程のあり方についても、各地域・国の実践現場とのギャップを小さくするような枠組みを検討し、提案していく余地もあると考える。

例えば、そうした各地域・国の環境に適する展開過程を再検討しようと試みる時、すでにほぼ完成されているといえるGSW 類型をベースに挑戦することもできるが、ライフモデルタイプをベースにそうしたテーマに取り組むことから、有意義な成果をもたらされる可能性があるのではないだろうか。もともとモデルレベルで提示された、大まかな区切り方を用いるライフモデルタイプは、シンプルな局面の構造をしており、局面に含まれる下位項目を入れ替えることで比較的容易に内容に変更を加えることができる。こうした特性から、自由な発想を生む土台を提供する可能性を秘めていると考えている。

本研究を通じて明らかにできたことは限定的であるものの、ソーシャルワーク実践の局面の類型とそれぞれの特徴について一定の整理はできた。ライフモデルの局面の区切り方をベースすることで、ソーシャルワーク実践の展開過程になんらかの新しい提言ができる可能性を探るといえるテーマについては、今後検討していきたい。

注

- 1) ソーシャルワーク展開過程の部分に区切られた構成要素は、「段階 (stage)」や「局面 (phase)」などと呼ばれている。明確な定義に基づいてこれらの呼称が使い分けられているという根拠となる文献を見つけることが出来なかった。そのため、研究者ごとに表現が違っただけで、同じ概念を指しているものととらえて論じている。また、本論では原則として「局面」という表現で統一した。
- 2) 「大学等において開講する社会福祉に関する科目の確認に係る指針について」(平成 20 年 3 月 28 日 19 文科高第 917 号・厚生労働省社援発第 0328003 号通知, 最終改正令和 2 年 3 月 6 日, 元文科高第 1122 号・社援発 0306 第 23 号) による。
- 3) ソーシャルワーク基本用語辞典では、「①インターク (受理面接: クライエントのニーズ, ニーズと機関が提供するサービスとの整合性, クライエントのサービスを受ける資格の有無を明らかにする局面)」(ソーシャルワーク学会 2013: 144) というように、各局面に番号がふられ、その内容の説明が記述されている。本論では、局面の区切り方に着目して紹介するために、番号や説明は省略し、局面の名称のみ抜き出して紹介した。
- 4) ただし、ソーシャルワーク過程の図では、この 4 つの他に「評価」が構成要素として加えられている (Johnson & Yanca = 2004: 350)。
- 5) インターベンションについては、Timberlake et al. はミクロ、メゾのジェネラリスト実践と、マクロのジェネラリスト実践に分けて解説している。
- 6) 日本語への翻訳は筆者による。
- 7) 日本語への翻訳は筆者による。
- 8) 日本語への翻訳は筆者による。
- 9) Gitterman et al. による局面の説明は、具体的な手順や活動を述べたものというより、その局面においてどのような援助展開のセッティング, 援助の様式, 方法, スキルが重要となるかを解説する内容である。このことも、この局面の分け方がモデルレベルで提示されたものであるという性質をよく表している。
- 10) 日本語への翻訳は筆者による。
- 11) Bogo (2006: 139) の表では、preparatory stage, initial stage, middle stage, end stage を同位として列挙しそれぞれにおける課題をあげている。しかし、second edition の表 (Bogo 2018: 192) では、

beginning stage, middle stage, endings に分けてそれぞれの課題をあげており、second edition では説明が若干修正されていることがわかる。

- 12) Gitterman et al. (2021) は initial phase の中に preparation や beginnings といった下位項目を設定している。一方で、Bogo (2018) は beginning stage の中に preparatory stage や initial stage 等の下位項目を設定している。こうしたところにも、両者の説明に類似点が見られる。なおⅢ. で述べたように、Gitterman et al. の枠組みについては目次の記述に従って 3 つの局面とした。
- 13) 日本語への翻訳は筆者による。
- 14) 日本語への翻訳は筆者による。
- 15) 邦訳された 7th ed. の展開過程の説明は、本文で説明したとおりである。この図は、9th ed. (Johnson & Yanca 2007: 186) では踏襲されている (筆者は 8th ed. の内容は確認できておらず、同じ図が採用されているかは不明である)。しかし、10th ed. では、Johnson & Yanca はこの図を修正している。「プランニング」と「評価」, および「援助活動」と「評価」を結ぶ矢印が、一方通行のものから双方向のものに変更されている (Johnson & Yanca 2010: 172)。この変更は、評価を経て進行しうる局面はアセスメント, 終結のみではなく、プランニング, 援助活動も含めたどの局面へも円環的に進行していくという、Johnson & Yanca のソーシャルワーク展開過程についての考え方を、より明確に反映させるための修正であったと考えられる。

文献

- Bogo, M. (2006) *Social Work Practice: Concepts, Processes, and Interviewing*. Columbia University Press.
- Bogo, M. (2018) *Social Work Practice: Integrating Concepts, Processes, and Skills*, Second ed., Columbia University Press.
- Compton, B., Galaway, B. and Cournoyer, B. (2005) *Social Work Processes*, 7th ed., Brooks/Cole, Cengage Learning.
- 福祉士養成講座編集委員会編 (2001) 『新版社会福祉士養成講座 8 社会福祉援助技術論 I』中央法規出版。
- Gitterman, A., Knight, C. and Germain, C. B. (2021) *The Life Model of Social Work Practice: Advances in Theory and Practice*, 4th ed., Columbia University Press.
- 一般社団法人日本ソーシャルワーク教育学校連盟編 (2021a) 『最新 精神保健福祉士養成講座 6 ソーシャルワークの理論と方法

[精神専門] 中央法規出版.

一般社団法人日本ソーシャルワーク教育学校連盟編 (2021b) 『最新 社会福祉士養成講座精神保健福祉士養成講座 12 ソーシャルワークの理論と方法 [共通科目]』中央法規出版.

岩間伸之 (2005) 「講座ジェネラリスト・ソーシャルワーク-No.1」『ソーシャルワーク研究』31 (1), 相川書房, 53-8.

Johnson, L. C. and Yanca, S. J. (2001) *Social Work Practice: A Generalist Approach*, 7th ed., Allyn & Bacon. (= 2004, 山辺朗子・岩間伸之訳『ジェネラリスト・ソーシャルワーク』ミネルヴァ書房).

Johnson, L. C. and Yanca, S. J. (2007) *Social Work Practice: A Generalist Approach*, 9th ed., Pearson Education, Inc.

Johnson, L. C. and Yanca, S. J. (2010) *Social Work Practice: A Generalist Approach*, 10th ed., Pearson Education, Inc.

久保絃章・北川清一・山口稔編 (2002) 『社会福祉士・介護福祉士養成講座 社会福祉援助技術論』相川書房.

Mattaini, M. A. and Lowery, C. T. eds. (2007) *Foundations of Social Work Practice: A Graduate Text*, 4th ed., NASW Press.

文部科学省高等教育局長・厚生労働省社会・援護局長 (2020) 「大学等において開講する社会福祉に関する科目の確認に係る指針について」(<https://www.mhlw.go.jp/content/000604914.pdf>;2021.10.15).

日本ソーシャルワーク学会編 (2013) 『ソーシャルワーク基本用語辞典』川島書店.

社会福祉専門職団体協議会国際委員会 (2016) 「ソーシャルワーク専門職のグローバル定義と解説 2016年3月版」(https://www.jacsw.or.jp/citizens/kokusai/IFSW/documents/SW_teigi_01705.pdf;2021.10.14).

社会福祉士養成講座編集委員会編 (2015) 『新・社会福祉士養成講座 7 相談援助の理論と方法 I 第3版』中央法規出版.

Sheafor, B. W. and Horejsi, C. R. (2015) *Techniques and Guidelines for Social Work Practice*, 10th ed., Pearson Education, Inc.

副田あけみ (2005) 「ジェネラリスト・アプローチ」久保絃章・副田あけみ編著『ソーシャルワークの実践モデル』川島書店, 135-57.

Timberlake, E. M., Zajicek-Farber, M. L., and Sabatton, C. A. (2008) *Generalist Social Work Practice: A Strengths-Based Problem-Solving Approach*, 5th ed., Pearson Education, Inc.